

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*設問の都合上、本文の一部を改めています。

Ⅰ

自分の名前のすぐ下に、母さんの名前と職業を清書すると、その下に並んだオヤジの名前をみつめる。職業の欄はまだ空白。オヤジも医者だったらいいのに。

トシはしばらく考えてから、意を決してカタカナで『セイジカ』と書いた。二世議員とかいうヤツだ。東京に仕事用の家を持っていて、トシの家とそこを往復している。っていうか、一年の大半はそちに行きつばなしだ。母さんの仕事の都合だとか、トシの「教育上の環境」だとかを考慮して、トシと母さんと離れて住むことを選択した、のだそうだ。

トシのお父さんは立派な仕事をしてるんだよ。

母さんや知り合いの大人たちはよくそう言ったが、トシにはまるでそう思えなかった。離れてるせいもあるけど、政治家って具体的にどんな仕事なのか、よくわからない。ワタルの父さんが工場の人に慕^{した}われる時のようなあの空気は全然感じられないし、テレビや新聞で言われる「政治家」のイメージはたいがいが悪いものばかりだ。

やり飽きたゲームソフトをショップに売りに行く時、手続きの用紙に親の職業を書かされる欄がある。トシはいつでもそこに『医者』と書く。保護者の名前がたとえオヤジになっていても『医者』と書く。

トシの家は三人家族なので、家族構成はそれでおしまいだった。目の前のワタルは趣味や特技の欄を書いている。トシがそれにならって続きに取りかかるうとしたその時だった。新田アカリが誰かと話す高い声が、ふいに後ろから聞こえてきた。

「ああ、あの古くてボロい病院でしょ？ 私行ったことある」

思わず振り返ると、アカリと目があつた。① その一瞬で分かった。

アカリの目がふいつと離れる。それから取り巻きたちと顔をみ合わせクスクス笑う。悪口は続いているようだった。

今の聞こえよがしな声を、② トシは突然と聞いた。不思議とすぐには怒りがわいてこなかった。ただ驚いた。

前に向き直ると、心配そうにこっちの表情を窺^{うかが}うワタルと目が合った。そこで始めて、トシは急にぐつと胸を締めつけられたような気持ちになった。新田アカリを許せないと思った。自分はよりにもよって、ワタルの前で恥をかかされたのだ。

何だよ。

唇^{くちびる}の裏、考える言葉がどんどん乱暴になる。

何だよ、新田アカリの家なんか、どうせサラリーマンの父親だろう？ 母親なんか、専業主婦だろう？

古くてボロい病院。

確かにアカリはトシの家の病院に来たことがある。いつだったかみかけた。おじいちゃんが若い時に建てた病院は確かに古いかもしれない。だけど、母さんがそこでどれだけ頑張っているかをトシは知っている。まだ小学校低学年だった頃、熱を出したトシを家に置いて母さんは他の人を診療するために病院に出た。子どもだったトシはショックだった。母さんは、自分ではなくて他人の子を^(ア)ミにいった。その日、珍しくオヤジが帰ってきて、トシの横に添い寝した。悔しくて、頭がガンガンして、だけどそれを知れたなくて、無言で泣いていると、横で③ 「さすがだな」という声がした。オヤジだった。

胸を張るオヤジを横目にみながら、トシは何も言えなくなった。母さんにそばにいて欲しいとか、母さんは他の子の方が大事なんだとか、喉^{のど}まで出かかった言葉はそこで止まって引っ込んでしまった。

それが、母さんの病院だった。仕事だった。

それに、来年病院を改装する話があることを、トシは両親から聞いていた。奥歯を噛^かみ締める。アカリに文句を言おうと椅子^{いす}から立ち上がりかけた、その時だった。トシの目に、思いがけず他のクラスメートたちの顔が飛び込んできた。

たくさん目の自分がみえていた。アカリとトシの一触即発の空気をじっとみつめている。心配そうに様子を窺っている者もいた。

しかし、それは一部だけだった。注がれる目線の中で大半を占めるのはにやにやとこの状況を楽しんで笑っている目だった。トシは浮かした腰をそのまま椅子に下ろす。一体これは何だ。教室の中は奇妙に静かになっていた。

「やめなよ、アカリ」

A ような女子の声がした。咎める様子のない、からかうような口調。アカリが唇を微かに **B**。

「べつにいい。私、何も言っていないもん」
それから急にそっぽを向く。彼女が訴える声が聞こえるようだった。アンタは私を怒らせた。友だちになろうとしたのに、アンタはこともあろうにこの私を切って、よりにもよって私の嫌いなワタルを選んだ。私はバカにされた。

アカリと仲良くしたいとは思わない。向こうから離れてくれるのなら、こっちとしても願ったり叶ったりだ。だけど、この異様な雰囲気は何だろう。こんなことは今までなかった。

④ トシはあたりをみまわし、そこで初めて気がついた。みんな、誰かしらと大きなグループを作り、机を並べて作業をしている。教室を海だとするなら、壁に沿って固まっている机はさながら大陸のようだ。その中であって、トシとワタルだけが二人きりぽんと浮かんだ島だった。教室の中央、近くには誰の机もない。

「何してるんだ」

前の方で担任のハヤカワ先生が椅子から立ち上がる。みな、それを合図に顔をぱつと伏せ、各自作業に戻る。微かに洩れる嘲笑がトシの背中に、ナゴリのように届いてきた。

何かが少しずつねじ曲がり始めていた。

Ⅱ

「ワタルくん、バイバイ！」

アカリとその取り巻きが、手を振りながら駆けていく。

彼女たちは、方針転換をしたらしい。標的をトシ一人にしぼり込んだ。⑤ 本末転倒もいいところ。きつかけだったワタルのことなんてもうどうでもよくて、トシを一人ぼっちにするために、ワタルを自分から引き離すのが最優先。ワタルはいつでも俯いて、辛うじて聞こえるくらい小さな声で「ん」とか「ううん」とか⑥ 生返事をしている。

それがアカリの新しい遊びのようだった。徹底的な標的の孤立。敵が味方にならないなら、排除する。

⑦ 聞こえよがしな悪口もまだ続いていた。体育の時間、トシは百メートル走で好タイムを出した。すると後ろから声が聞こえた。「私、足なんか速くなくて良かったあ。⑧ ハンパに速いと中学に入ってから生意気だってシメられるって、お兄ちゃんに聞いたもん」

読書感想文が入賞しても、クラスでただ一人テストで満点だった時も、人を馬鹿にするようなクスクス笑いはついてきた。

「よっぽどすることないんだね。勉強なんかそんな一生懸命になってバカみたい。だいたい自分に自信持ち過ぎなんだってば、ムッカつく」

Ⅲ

トシの下駄箱から、上履きがなくなった。

空っぽの下駄箱をぽかんと見つめながら、トシは次にワタルのことを心配したが、あいつの上履きは大丈夫だった。もはや、狙いは本格的にトシ一人だ。

職員室に行って先生に事情を話す。来客用の緑色のスリッパを履くと、安手のスリッパの底はべらべらで、歩く度ぺたりぺたりとマヌケな音がした。トシを座らせ、事情を心配そうに聞く先生は、すごく驚いているように見えた。しかしそれは、自分のクラスにこんないじめめいた嫌がらせが存在するということに対する驚きもだけど、その標的が他ならぬトシだということに対する驚

さも多分に含んでいるように見えた。

当然だろう。トシは思った。されている自分でさえ、まだ信じられないくらいなんだから。

先生とひとしきり話して廊下に出ると、ワタルが立っていた。顔が泣きそうだ。

トシは笑った。「行くぞ」と、ワタルの頭を軽く叩き、先に立って歩いた。

教室に入ると、クラスメートたちはトシに挨拶をしなかった。バカバカしいから、トシも自分からはしなくなっていた。彼らの視線が、トシのスリッパの足を見ている。大っぴらには見えない。忍び見て、目を伏せる。隣の席の誰かと、それから笑う。

朝の会が始まり、先生が前に立って言う。トシの上履きがなくなったこと、それから心の豊かさや貧しさについての話。みな、前を向いて真剣なオモモちでそれを聞いている。でも、トシは知っている。⑧ トシのスリッパのつま先と今の先生の話してい

る心の貧しさが彼らの中で決して結ばれることがないことを知っている。

「誰がやったとか、そんなことじゃないんだ」

先生は悲しそうだった。トシはハヤカワ先生が好きだ。悲しませてしまうのはつらかった。ごめん、先生。

「もし、どこに上履きがあるのか知っている人がいたら、先生に教えてください。……本人に直接返してもいい」

先生の顔だけ見ているトシを、新田アカリが微かに振り返った。目は合わなかったが、アイツが見たことは分かった。アカリはすごいな、皮肉じゃなく思う。

上履きを隠したのがアカリかどうかは問題じゃない。クラス中を巻き込んでトシをこんな境遇に落としてしまえる、その力がすごいと思った。一体どんなゲイトウを使ったのだろう。

先生の懇願するような声に、誰も返事を返さない。上履きは、校庭にある鯉の池の中に捨てられていた。

(辻村深月『ロードムービー』による)

問一 〓(ア) (オ) のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、(ア) は「I」の文中からさがし、抜き出しなさい。

問二 A・B に入る語として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|---------|---------|----------|--------|
| A | ア たしなめる | イ 諭す | ウ 言い含める | エ はやし立てる | オ 茶化す |
| B | ア ゆがめる | イ とがらせる | ウ 開く | エ 閉じる | オ すぼめる |

問三 ①「その一瞬で分かった」とあるが、トシには何が分かったのか。その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア アカリはトシのことが本当は嫌いだったのだということ。
- イ アカリの言葉はトシの家のことを言ったものだということ。
- ウ アカリがトシの母さんの仕事をねたんであるということ。
- エ アカリの標的がワタルからトシに変わったということ。

問四 ②「トシは呆然と聞いた」とあるが、その時の気持ちの説明としてあてはまる一文を「Ⅲ」の文中からさがし、最初の五字を抜き出しなさい。

問五 ③「さすがだな」は、登場人物三人の行動に対するオヤジの感想である。その三人を明らかにし、どのような行動に対する感想なのかをそれぞれ二十字以上、三十字以内で説明しなさい。

問六 「Ⅰ」の文中から次の一文が抜けている。本来あるべき場所をさがし、その直後の五字を抜き出さない。
声のトーンが落ち、小声になる。

問七 — ④「トシはあたりをみまわし、そこで初めて気がついた」という状況を言い表している語を、「Ⅱ」の文中から漢字二字でさがし、抜き出さない。

問八 — ⑤「本末転倒」と同じ組み合わせの四字熟語として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 有名無実 イ 一朝一夕 ウ 起承転結 エ 玉石混交 オ 一部始終

問九 — ⑥「生返事」・⑦「聞こえよがしな」のここの意味として最も適当なものを次の中から選びなさい。

「生返事」

ア あいまいで短い返事。

イ 生き生きとした返事。

ウ はっきりしない返事。

エ 感情をおさえた返事。

「聞こえよがしな」

ア 当人のそばで悪口などをわざと聞こえるように言う様子。

イ 言いにくいことを直接相手に言わず、それとなく伝える様子。

ウ 普段よりも大きな声で、みんなに聞こえるように言う様子。

エ 本人が気付かないのいいことに、大声で悪口を言う様子。

問十 — ⑧「トシのスリッパのつま先と今の先生の話している心の貧しさが彼らの中で決して結ばれることがない」とはどういうことか。四十字以上、五十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*設問の都合上、本文の一部を改めています。

老人のあいだには独特の情報ネットワークがあるらしく、脳の老化防止には難しい計算でなく小学一、二年生程度の簡単な足し算・引き算や漢字の書き取りの方が効果があることも、私は新聞やテレビより先に母から聞いて知っていたし、NEET（ニート）という言葉も週刊誌の見出しで見かけるようになったのとはほとんど同じタイミングで、母がそれを口にするのを聞いた。

NEETは社会問題であるわけだが、老人たちにとっては仲間の誰かの子どもや孫に一人か二人は、学校にも行かず仕事にもついていない若者がいるはずだから、社会問題である以上に、自分自身の家庭の問題、ということなのかもしれない。

そういうわけで、いまマスコミで盛んに取り上げられている脳の老化防止トレーニングは、もともと①現場（？）の老人のあいだで静かに広まっていたもので、それは納得のできるトレーニングだった。ところが、それがテレビにまで波及して、「脳年齢が二十代の驚異の老人」みたいな番組になってしまうと、②ろくでもないものになる。

先日見た番組では、「数々のクイズ番組でチャンピオンになったことのある七十代女性」というのが登場した。彼女はアメリカの歴代大統領を全部記憶している。

番組では脳年齢のテストとして、コンピュータの画面に次々映る図形だったか数字だったか、そういうのと同じもの同士を指で押してゆく、まあ言ってみれば少し高尚なモグラ叩きみたいなことを彼女にさせて、目からの認知と指先の反応速度か何かを測定して、「二十代の脳です」みたいなことを言って、感心したり驚いたりしていたわけだが、一緒にテレビを見ていた妻いわく、「チンパンジーのアイちゃんが、同じようなことをやってるよね。」

京大霊長類研究所の天才チンパンジーのアイちゃんは、コンピュータの画面にあらわれる図形の色と形が一致したらそれをタッ

チするような遊び（トレーニング？）を毎日せつせとやって、ご褒美のリンゴやバナナを食べているではないか。アイちゃんのあの様子を見ると、私はいつも「人間だったらこんな単純なことを何日もつづけるわけないよな」と思うのだ。

アイちゃんの図形を認識する能力がもしかりに小学低学年くらいあるとしても、同じ年齢の人間だったら二、三日で飽きてしまうだろう。もし万が一、アイちゃんの能力がこのままぐんぐん伸びて、数学の連立方程式まで解けるようになったとして、そのトレーニングを、ご褒美のバナナほしさにやっていたとしたら相当おかしい。といっても、人間にもたまに変なのがあって、全然場違いなところでペラペラペラ恥ずかしげもなく高尚そうな話をしゃべりまくったりして、そういう人を見ながら私は「コンピュータみたいなやつだな」と思うのだけれど……。

コンピュータというのは自分がどんな部屋に設置されているか、まったくわからない。だからコンピュータは雨漏りがするようなぼろぼろの部屋に置かれていても、ガラス張りのインテリジェントビル設計図を描けてしまえたりする。人間だったら、「少しは俺の住環境を良くしてくれよ」とでも言うだろう。「こんな部屋で、そんなもの設計してるなんて、照れくさくて、やってらんないよ」とも言うだろう。ここに人間の人間らしい能力がある。人間で、ただ一点だけ能力を突出させて **I**、その人は歪なのだ。

同じように、毎日、研究室に入れられて、その中でコンピュータの画面と遊びつづけるチンパンジーのアイちゃんも歪なのだ。——ただし、これはアイちゃんが悪いのではなくて、そういう研究をチンパンジーにしている人間が悪い。チンパンジーにはジャングルを自由自在に動きまわり、そこで決して迷子にならない能力や食べられる葉っぱと食べられない葉っぱの識別能力など、多岐にわたる膨大な能力があるわけで、図形の認識というような、人間並の能力はチンパンジーにとっては片隅のあんまり必要のない能力のはずだ。

かれこれ十年前の受験シーズンのこと、三十代終わりの私は、新聞に掲載された都立高校の入試問題を解いてみようとして驚い

た。どの教科も出題の仕方が面倒くさくて、問題を解くどころか、その問題の意味する世界に入っていけないのだ。学校に通っていた頃はそんなことまったく感じなかったが、試験問題というのは複雑な構造をしているのだ。

たとえば地理の試験では、まず地図が出ていて、「この地図に描かれている地形にはいくつかの特徴があります」というように、これから出題される問題の前提となる条件を理解するところから始まる。その前提を理解できてはじめて、具体的に出題されている「A地点とB地点の地形を比較して、どちらが農耕に適しているか答えなさい」という問題にとりかかることができる。つまり、試験問題というのは二重の手続きになっているのだ。

この話を、その直後に会った精神科医のSさんに言った。私はその話題を出すと、Sさんが「保坂さんもそうでしたか。」

私もこのあいだ、ちょうど③同じことを感じたところだったんですよ。

そういう風を感じたのが、自分ひとりではなくて安心しました。」

精神科医のSさんは世間的にみれば、ひじょうに複雑で難しいことを考えている。しかし、すべて専門分野というのは外から見たら複雑で難しいものであって、大人Ⅱ社会人はみんな何年も時間をかけてその世界に馴染んで、エキスパートとなった。大人が生きている世界は前提となる条件がほとんど不動であって、試験問題みたいに、問題ごとに前提が変わって、それに合わせて思考法を切り替えなければならないようなことは、実社会では④メツタにない。精神科医のSさんだって、そんなことはもうお手上げなのだ。

ここには人間が実社会で生きていくということに関わる重要な⑤アリテイがある。社会人として専門分野を職業とするということとは、専門分野がどこかでその人の人生観や世界観と響き合う切実さを持っているということだ。使命感と言ってもいい。医者や成績が良くて医学部に入れたから医者になったわけではなくて（そういう人がいないわけではないけど）、医者という仕事が必要

だと思っから医者になったのだ。

仕事に誇りを持っている人と話をしているときに、こっちがうかつに⑥トツビな仮定の質問をしてしまうと、とんでもなく返事が許せないのだ（小説家としてたぶん私もそのような返事をしているだろう）。

仕事はパズルではない。だから、ありえない仮定に立った頭の体操みたいなことをするよりも、ありうる仮定の話なのに実現できていない問題の解決方法を考える方がずっと意味がある。パズルというのは不慣れな人には異常に複雑で、パズルをすらすら解く人はものすごく頭が良く見えるけれど、パズルはパズルでしかない。パズルには現実存在する人間や組織の煩わしさ⑦わづらが絡んでいないから、慣れてしまえば案外やさしいものなのだ。だから仕事では、パズルのようなありえない仮定の⑧シミュレーションをするよりも、実現できるはずなのに実現できていないことの解決方法を考える方がずっと難しい。

④脳の老化はここに関係しているのではないか。

老化していない脳を持っているクイズ王の女性の知識は、現実との接点を持っていない。アメリカの歴代の大統領の名前を言うときに、彼女は「ケネディが損、損。損して、ジョンソン、ニクソン、損したけど、フォードを買ったあ、カーター、……」というような、暗記ものが得意な受験生みたいな記憶の仕方をしていて、彼女の歴代大統領の記憶は、彼女自身の個人史とも、彼女が生きた社会の出来事とも何も関係を持っていなかった。つまり、脳年齢が若いということは、記憶が現実と無関係であるということであることを意味する。それは、自分自身の経験を持たない子どもと同じという意味でもある。

ふつうの大人は、個人史や忘れられない社会の出来事とセットにして、アメリカ大統領や日本の総理大臣を記憶しているから記憶の引き出しが重くなる。生きていくには、そういう記憶でなければ意味がないのだから、年齢とともに記憶の引き出しが重くなるのは当然で、それだけの理由があるということだ。

100 から7を何回も引いていく引き算や、小学低学年の漢字ドリルを一日十分そこらやることで、脳の老化を防止できて、物忘れが軽くなったり、新しい物事への対応が少しくなったりするのなら、やればいい。しかし、もしそれ以上の時間や手間をかけて脳の若さを保とうとするのなら、^⑤ **時間の無駄だ**と私は思う。老人になってからパズル好きの子どもみたいな生き方をしたところで、何か得られるものがあるだろうか？

必要なことは、人生とは「生きた時間が長くなればなるほど、記憶の引き出しが重くなったり、斬新なアイデアが出にくくなったりするものである」ということを知ることはないかと思う。人間というのはそういう風に設計されているのだから、そうなたらなつたで、それに見合つた考え方や関心の対象が生まれるはずではないのか。

それには必然的に「死」が含まれるだろう。

保坂和志はまだ若くて「死」を自分の問題だと思っていないから、そんなことを簡単に言えるんだ？

とんでもない。夏目漱石の^(ウ) **享年**は四十九歳で、今年私は漱石の享年と同じになる。宮沢賢治の享年は三十七歳で、正岡子規は三十五歳だ。私が「死」という言葉を書いたって早すぎるということはない。

二十一世紀初頭の日本に住んでいる私たちは、「老いたくない」「いつまでも若くありたい」という奇妙な文化の中で生きている。しかし、努力で老化を先送りすることはできたとしても、死それ自体を避けることはできない。いまテレビや雑誌がさかんに取り上げる、老化防止はみんなが「死」を考えることを避けるように働きかけているように私には見える。しかし、「死」と「老い」について考えることは、文化の核のはずで、そこに最も豊かな思索が息づいているのではないだろうか。

(保坂和志「老いることに抗^{あらが}わない」による)

(注1) エキスパート……ある分野で十分経験を積み、高度の技術・技能を持った人。

(注2) リアリテイ……現実。

(注3) シミュレーション……現実とそっくりの状況を作り出して分析する方法。

問一 〓(ア) (ウ) のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直さない。

問二 ① **「現場」**(?) とあるが、**(?)** をつけているのはなぜか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 老人が脳のトレーニングに取り組む様子は、「現場」という言葉の雰囲気^{きふき}にそぐわないと思ったから。
- イ 話には聞いていたが、実際に老人が脳のトレーニングに取り組んでいるとは思えなかったから。
- ウ マスコミで取り上げられている部分だけを「現場」と呼ぶのはおかしいと思ったから。
- エ トレーニングを取り入れている老人ホームを「現場」と呼ぶことに抵抗を感じたから。

問三 ② **「ろくでもない」**とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア チンパンジーと同じトレーニングが人間に効果的だとは思えなかったから。
- イ 老人をコンピュータのように扱うことにためらいがなかったから。
- ウ 老人は世間から注目されずに静かにトレーニングを行いたいはずだから。
- エ 脳の老化防止という本来の目的がすっかり見失われていると思ったから。

問四

I に入る語句として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 同じ作業を繰り返すならば
- イ 誇らしげにしているならば
- ウ まわりが見えなければ
- エ 高度な仕事ばかりしているならば

問五

③「同じこと」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 二重の手続きを要する入試問題の世界に、もはやついていけないということ。
- イ 入試問題を解く上で前提となる条件を、いつしか理解できなくなったということ。
- ウ 自分がいつの間にか入試問題を解けないくらいに衰えてしまったということ。
- エ 入試問題の複雑さは専門分野の持つ複雑さ以上に難解なものであるということ。

問六

II に入る語句として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 人聞きの悪い
- イ 融通のきかない
- ウ 間の悪い
- エ 現実離れた

問七

④「脳の老化」とあるが、

- (1) 筆者が考える「脳の老化」とはどのようなものか。本文のここより前の部分にある言葉を用いて六十字以上、七十字以内で説明しなさい。
- (2) 「脳の老化」が進行することを他の言葉で表現している十字程度の語句を、本文のここより後の部分から抜き出しなさい。

問八

⑤「時間の無駄だ」とあるが、これはなぜか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア パズルで脳の若さを保つより、脳の老化を受け入れ、死や老いについて考えることの方が大切だから。
- イ 子どものようにパズルを処理する能力を高めても、大人の世界で尊敬や利益を得られるわけではないから。
- ウ 脳の老化が多少防止できたとしても、やがてくる「死」というものを避けられるわけではないから。
- エ どんなにパズルを処理する能力が高まっても、現実生活では役に立たないから。

問九

次の中から、本文の内容と一致しているものを二つ選びなさい。

- ア チンパンジーには、脳の訓練をさせるばかりでなく、野生の力も身につけさせなければならない。
- イ 脳の老化は全ての人間に起こる悲しい出来事であり、医者のような優秀な人間にも避けられない。
- ウ 人々が脳の老化防止としてパズルに取り組んでいるような国に、本来あるべき文化は成立しない。
- エ 多くの文豪たちと同じように、若いうちから死について考えることは、人間として大事なことだ。
- オ 脳の老化は大人としての生き方をしているかぎり避けられないことであり、否定すべきではない。
- カ 脳年齢の若さを保つためには、現実と響き合う切実さを持つていることが大切だ。